

令和4年度 第1回 高知県立図書館協議会・高知市立市民図書館協議会 議事録

○日時

令和4年7月14日(木)10:00~12:00

○場所

オーテピア4階 ホール

○出席者

別紙出席者名簿のとおり

○開催内容

1 開会

県立図書館長あいさつ

委員紹介

会長・副会長の選出・・・会長:加藤委員 副会長:篠森委員

議事録署名人の選出・・・久寿委員

2 議事

(1)オーテピア高知図書館サービス計画推進委員会について

(オーテピア高知図書館サービス計画[第1期]の成果と評価等)

(2)令和4年度事業の主な取組状況等

(3)その他

3 閉会

市民図書館長あいさつ

○議事録(※議事内容について事務局から説明後、意見交換)

議事(1)・(2)

(委員)

資料1の1について。

電子書籍の閲覧回数が半分に減っている。中学生の孫が子どもの頃は本を選定することがすごく楽しくて送ってあげたりしていたが、だんだん自分で選ぶようになった。最近は電子書籍の時代になって「Kindle(キンドル)で読むから、本はいいよ」と言われて、とても寂しくなった。もうそういう時代になっているのだなと思い、Kindleの金額を調べてみた。アマゾンと提携しているアプリで、どの程度網羅しているかわからないが、同じ本でもKindleと紙の本それぞれの金額を表示している。これを見て、もうこれからは電子書籍が多くなるのかなと、身近な人の読書スタイルの変化から実感した。

ところが、このような状況でもオーテピアの電子書籍の閲覧回数は少し減っているので、皆さん知らないのだろうか。事務局の説明で県立学校と連携する話もあり、アプリもあるようだが、やはり自分でアクセスしないと電子図書館のことは分からない。これからは、こういう時代なのかと思った。令和3年度の閲覧回数が減ったのは、やはり、令和2年度に巣ごもりによって増えたのだろうか。あるいは、皆さんがもう自身でアプリを取り入れて、自分で購入して読んでいるのか。社会のすう勢だろうが、閲覧回数が半分になったので、少し驚いた。

(事務局)

令和2年度は1か月程度休館した時期があり、その際に新聞等で電子書籍の記事を掲載してもらったことで、閲覧回数が急激に増えたことが背景にある。ただ、昨年度は、令和2年に比べると半減しており、当館でももっともっと電子書籍をPRしていく必要性を感じている。学校現場で、ギガスクールが始まり、県立高校でも1人に1台タブレットを導入している。それに合わせて高知県電子図書館が使えるようにアカウントを発行する作業を進めている。ただ、電子書籍の市場自体が紙媒体に比べるとまだまだで、提供できるタイトル数が伸びたとしても8パーセント程度。書籍の世界ではまだまだ紙媒体が主流なので、図書館としては電子と紙と両方のハイブリッド型で資料を充実させていきたい。

(事務局)

令和2年度に閲覧回数が伸びた理由について、電子書籍のサービス提供者側が、時限的に図書館向けのコンテンツを提供していた。これらは現在は提供されていないが、比較的魅力的なコンテンツが多かった。令和2年度と大きな差があるのはその影響もあるのかと思う。

(委員)

図書館で電子書籍が利用できることを大人が知らないということもある。子どもや若い人もそうだが、大人でも電子書籍のことを知れば、もっと利用してくれるのではないかと思う。ただ、どうやって知らせるかとなると、なかなか難しいので、そこが課題だと思う。

(委員)

高知県電子図書館に関して、広報や今後の戦略について、もう少し情報提供していただければと思う。

(事務局)

まだまだ電子図書館の広報が足りていないのが実態だと思う。高知県で電子図書館を県単独事業として行っている理由は、オーテピアに来館しにくい中山間地域や遠方の方々にも読書環境を提供する目的もある。例えば市町村の広報誌に電子図書館のPRの記事を掲載してもらおう等、様々な方策も考えているところだが、まだまだ広報が足りていないのが実態だと感じている。

(事務局)

新聞で記事にされると閲覧回数が突然増える。令和2年度は全国的にスペシャルなコンテンツがあった関係で記事が掲載されたので、特に多かったと思う。「こういうコンテンツを増やした」というのを、なるべく小まめに新聞に掲載してもらうことができれば、利用につながられるのではないか。

(委員)

オーテピア高知図書館全体での取組状況、各組織がどのようにして全体像をまとめて、取り組めたのかについて。コロナの影響が大きくあり、この図書館に関する取組の走り出しや利用率に関わってくると思うが、その中でも県民に対していろいろな施策を講じながら取り組まれている。順調でスムーズに取り組んでおり、非常に素晴らしいと感じた。

先ほど電子図書の普及について、新聞等による広報の話があった。新聞は全県下で皆読まれ、目を通され

ているのでその普及率は高いと思うが、中山間地域ではまだまだ電子図書について、あまり意識が高くないと思う。そこで、中山間地域のそれぞれの市町村図書館で、電子図書館をどう活用すれば、自分一人で簡単に見られるかということを広げていくことが1つある。また、県からは皆が目にする新聞等で宣伝をしていただくことの両方の施策で取り組むことが効果的かと思う。

私自身この3、4か月、各市町村の図書館の意識もすごく高まっていると感じる。各市町村同士が図書館へ見学に来て、司書もよりよい事業をしたいという意識に変わってきている。しかし、司書だけではどうにもならない。母体である市町村も意識が変わってきていることをとても感じている。

私が訪問した県立校では、それまでの訪問では一度もなかったが、「図書館を見てください」と図書館を説明する先生のがすごく活気溢れる意識を感じた。このオーテピアが発足してから、県立校で司書の方が図書館をPRするのは分かるが、教員が「うちの図書館はこれ。どう思いますか」という学校に訪問し、すごく職員も意識が変わってきているのを感じた。子供たち、生徒が、その図書館を利用し図書館に興味を持ち出した様子をとても感じた。

県の一番の課題でもある人材育成や地域振興などの拠点に、各図書館がなっている。オーテピアが大きな母体でもあるが、各市町村でもオーテピアでの取組を共有しながら、それぞれの市町村で発信していくことが、自分たちの生活が潤う拠点になると感じている。オーテピアに来るたびに感動する場面があり、また帰って、図書館や校長園長会でそれを伝えたりしている。そういったことで、市町村側もとても意識が変わってきているので、非常にいい。

先ほどもお話にあったが、今後はやはり電子図書館もすごく大事なこと。皆さんそれぞれで個別の学習をしていく、あるいは先を見ると、大学自体が変わってくる。自分たちで調べたり、勉強したりする部分は大いにあると思うので、電子書籍を広めていきたい。

(事務局)

県立図書館の使命として、市町村立図書館と、県立学校図書館の支援がある。まず市町村支援については、人的支援、物的支援を実施しており、県内でも新しく新館を整備する市町村が増えてきている。地域の住民が新しい図書館に求めるものは本を貸すだけでなく、課題解決を支援できるような図書館へと変わっている。新たに整備をする図書館にオーテピアが培ってきたノウハウをできるだけ伝えていきたいので、重点的な支援をしていきたい。

県立学校については、2年程前から県立学校の訪問を強化しているが、実習助手の方だけに話をしてもなかなか学校全体の取組が変わることにはならないので、私も直接伺って学校長に話をさせていただいている。その際に電子図書館のPRもして、学校として取組を強化していただけるように話を進めている。加えて、最近は県立学校だけでなく私立学校にも訪問した。高知の子どもには変わらないので、同じような形で取組を強化していきたい。

県立図書館としてやっていくべき課題や、まだまだ足りていない部分もあるので、2期計画の充実に向けて、取組をさらに見直し、やり方を変える、ということも検討しながら進めて参りたい。

(事務局)

各市町村図書館の電子書籍の導入状況と対応状況は、ある程度分かっているのか。

(事務局)

県内の市町村では、須崎市立図書館が、今年度初めに電子書籍を導入したが、他の市町村にはそういう動きはまだ今のところ広がっていない。

(委員)

やはり身近な地元の図書館で、電子図書館の利用に関して、使い方の具体的な方法等がわかるような環境があることが望ましいのは間違いないと思う。今後また、その辺に留意して活動していただければと思う。

(委員)

コロナ禍において集客するのはなかなか難しかったと思うが、十分健闘している。やはり図書館に利用者の需要があったのだなという数字かと思っている。自分の年齢的なこともあるが、やはり自分は本やものを読むのはペーパーベースで読みたいという思いがある。電子図書館の資料が出ているが、全部画面上で読んでいくのは結構しんどいところもある。しかし私たちの中にはペーパーをめくる作業が難しい、あるいは視力の関係で読み上げてほしいという人たちがいるので、電子図書館はそういう方々にとっては非常にありがたいこと。一昔前に、本をめくる機械が補助具であったが、今後そういうものは必要なくなってくるのかと思い、時代の流れを感じる。紙と電子のどちらも充実して欲しい。利用する私たちの選択できる幅が広がったのは非常にいいこと。

計画の中に外国人、知的障害、発達障害など、人々の中でもマイノリティーな方々のところを押さえてくれているのは、私たちにとっては非常にありがたく、今後も進めて行ってほしい。ただし、年齢的にはペーパーベースの本をもう少しアピールしてもいいかなという思いもある。

私は分館や分室にも行くことがあるが、以前よりも人が明るい気がして、非常に使いやすいと思う。オーテピア開設の時期辺りから分館や分室が改修されたり、新築されたりしたので余計そう思うのかもしれないが、地域で明るい図書室があるのは非常にありがたい。

(事務局)

電子図書館も紙の資料もどちらも必要で、どちらも資料の一部ということで、すべてきちんと収集をしていきたいと思っているので、安心してほしい。

21の分館・分室と移動図書館について、歴史が長く、施設自体も古くなっているものもある。潮江市民図書館は2年前に耐震改修を行い、外観は大きく変わっていないが、内部はエレベーターも大きくなっている。仕様が変わったタイミングで、耐震の鉄骨がむき出しになった部分を工夫して楽しい空間にしていたり、分館・分室の職員が楽しみながらやるというところが、明るく感じる部分に出ているのかと思う。現在、旭分館のあった木村会館が全面改修工事中で、イオン高知旭町店に仮設図書館のスペースを設けている。そこで今まで来館されたことのない新しい利用者層の開拓にもつながっており、木村会館に戻ったときにも来館してもらいたい。

また改修工事をするときに、できるだけ対面音訳室も設置をするように考えている。潮江分館でも設置し、旭分館でも対面音訳室を設置する計画をしている。現在はコロナの感染防止対策で個室は閉じているが、また使えるようになったら皆さんにご利用いただきたい。

(委員)

例えばティーンズのサービスはちゃんと項目があるが、図書館の高齢者サービスという考え方はあるのだろうかといつも思う。どうしても高齢者は、図書館の利用に差し障りがあるケースが障害のある利用者と重なり合ってくることが多いと考えられる。また、育った環境や年齢も考えると、新しいものへの対応は、2つに分かれる傾向がある。新しいものにまず飛びつくという方と、そこまでしなくてもという方に分かれる。その辺に関しては、明確な形にするかどうか。例えば、高齢者サービスという項目を立てるかどうかは別として、サービス計画全体の中できちんと位置付けていくことが必要だというご意見だろうと思う。

これに関して、今後高知県全体、市の高齢者への対応に関わることで、図書館政策とも関わると思うが、今、お考えのことがあれば事務局からコメントいただきたい。

(事務局)

高齢者サービスについては、今は図書館の利用に際し、障害のある人へのサービスに含んでいる。今後そのサービスの内容について、多岐にわたるサービスが増えてくると思うので、その中でまた検討していきたい。2期計画で新たに柱立てをしたわけではないので、すぐにサービス項目を立てるといった回答は難しいが、今後、サービスの見直しをする中で検討していきたい。

(委員)

高齢者の方がどんどん図書館を利用していただけるような方向へ進むと思う。

(委員)

オーテピア、県内の図書館で、改革や進化が続いていると、しみじみ感じた。個性的な図書館とか、その所々での強みを出したところが増えているのではないかと感じている。

今後デジタルがどんどん進んでいく。それは進んでいかなければいけないことだと思う。周りの若い人たちを見ても、本を読むのもスマホ等で読んでいる。あれで目が痛くならないのだろうか、ブルーライトは大丈夫だろうかとすごく心配するが、もうどんどんデジタルの方へ流れていっている。先ほど電子図書館について新聞に掲載されたら、すごくそれが効果的だという話があった。新聞やテレビを上手に活用するのも戦略だと思うが、今の若い人は新聞はあまりとっていない。だからそういうこともこれから先考えて、PRしたいことがあるときに、飛びついてもらえるような、周知してもらえる媒体として新聞やテレビの他に何かあるのかなと、自分でも考えた。

やはり連携がすごく大事だと思った。学校や保育園の連携等。近くに図書室や分館・分室があるような保育園だったら、昔はよくお昼寝がなくなった年長さんが、図書館の分館・分室に遊びに行っていた。保育園側からも連携をしていく必要があるが、楽しいこと、イベント、こんなものが入ったよということがあれば、お知らせしていただければいいのではないかと思った。

これまで高知市の保育関係者では、子どもたちが集まって、高知市の保育園の保育士さんたちが作った手作りの遊具と一緒に遊ぶ日が年間に3日ほどあった。それがコロナ禍以降できなくなって、今年はこのオーテピア高知図書館で手作り遊具展を展示させていただいた。保育園の中には、絵本に基づいた人形、指人形やちょっとした作り物を作っている保育園がある。絵本とその手作りの遊具と一緒に展示するのも楽しいのではないかと思った。

先ほどティーンズのレベルを上げていく話が出ていたが、学校や保育園との連携についても、各図書館や

分室と学校等とが連携して何かができたらいいと思った。テレビで高校生たちが地元の市町村の魅力のあることのごく素敵な紹介動画を作っていて、すごいなと思った。大人やビジネスマンが考えるのと違って、高校生が考えるその土地の素敵さや、「こんな産業、農作物がありますよ」というような紹介をしていて楽しかった。ビジネス支援で移住の件が出ていたが、そんな取組とコラボして、図書館や学校で発信するのも面白そう。

サービス間で差ができていく件について、ティーンズや多文化はこれから、また、先ほど高齢者のことも出ていた。高齢者に関しては、高知県は特に中山間地域は高齢者が中心で、なかなかデジタルでの利用にはいけないと思う。紙ベースがいいし、紙ベースでも目がチカチカする、小さい字が読みにくいということがあがる。私の父が朗読のボランティアをしていたが、朗読のサービスは今どうなっているのか。デジタルでいろいろなことができるのか。

サービス間で差ができていくうちに、トップレベルに近づいているサービスが幾つかあるという評価について、特に注力しているサービスを聞きたい。

(事務局)

対面音訳サービスについて。資料 1-1 の 2 ページの、3-4 の図書館利用に障害のある方へのサービスの右の方に、対面音訳サービスの利用回数の実績を記している。また、ボランティア登録者の数値を記載している。1 階のオーテピア高知声と点字の図書館と連携して、対面音訳等ができる方のボランティアの育成とスキルアップなどの研修会を当館でも実施している。その中で対面音訳サービスも提供しており昨年度が 971 回だった。令和 2 年度から、コロナ禍の中でなかなか来館しづらいという声があり、昨年からはスカイプを使う等やり方も工夫しながら取組を進めている。

主要なサービスでは、当館は課題解決型図書館として力を入れている。従来型の小説や絵本の貸出しをすることも当然図書館としての重要な役割だが、それだけではなく、課題解決を支援する図書館として、ビジネス産業、健康安心防災、それと行政支援サービスを提供している。

オーテピアが開館したときには当館からアウトリーチを行い、いろいろな機関に連携のお話を持って行っていたが、現在では、逆に外部の方からオーテピアと連携をしたいというお声をたくさんいただいている。大変ありがたいことだが、単なる場所貸しではなく、互いにメリットのある形で連携をするということで話を進めている。

今年始めた取組例では、高知学園短期大学の幼児教育の学生が 10 人ぐらいオーテピアに来ていた。元々児童サービスの中で絵本の読み聞かせ等で、学生たちの力を借りる考えがあった。来館時にちょうど読み聞かせのイベントをしていたので、学生に現場を見せたり、館内を紹介する中で逆に学生の方から、「私たちももっとこんなことやりたい。こんなことしたい」というような提案があった。現在、学校の中でその点を整理してプレゼンもすると伺っている。私たちが考えている以上に、学生たちの柔軟な発想、アイデアがある。そういうものをもっともっと活用して、オーテピアの職員だけではなく外の力も借りながら広げていきたい。

(事務局)

市民図書館の立場から、21 分館・分室がある中で地元の各分館・分室のその地元の学校、保育園・幼稚園とは、以前から連携はしている。ただコロナの関係で少し行き来が難しくなったので、この 2 年ぐらいは随分減っている状況。オーテピア高知図書館ができたが、市民図書館としてはそれぞれの地元の分館・分室に通っていただきたい。分館・分室の職員も学校に読み聞かせに行かせていただいている。すぐそばに、分館・分

室があることを認識してもらいたいし、先ほどのお話にあった学生が紹介動画を作って魅力発信することも、地元の中学校とやると楽しいかなとアイデアをいただいた。

保育園の手作り遊具展について。例年、保育園で実施されているものに比べて規模は小さくなっていったと思うが大好評で、一緒に展示をした手作り遊具の作り方のチラシも、すぐに無くなる状況だった。子供たちが遊具に実際に触れて楽しそうな様子を見ると、コロナ禍以前に実施していた手作り遊具展は、やはり大規模に大変楽しくやっていたのだろうと想像できた。オーテピアを使ってこのような形で事業を実施していることを宣伝していただく連携もあると思う。また、保育園の園長先生の研修会や、月1回の会もこのオーテピアを会場として開催されており、開館初期はその機会に当館の児童サービスや図書館機能の紹介をしたことがあった。そのような形でこちらの情報を現場の方に知ってもらい、図書館を使うこともこれからも進めていきたい。

(委員)

オーテピア高知図書館サービス計画の策定にも参加したが、だんだん中身が充実してきている。

委員から電子書籍のお話があったが、特に2つの観点があり、コロナの観点ともう1つは距離的・場所的な観点がある。新図書館基本構想の頃から一緒に参加していたが、やはり県としては全県的な発展が目標としてあり、高知市から遠い市町村というのも多数ある。遠方の方々からしたら、やはり県立図書館が高知市にあり、それが充実したとしてもなかなか行きにくいというご意見もある。そういった意味で市町村図書館の充実が委員の皆さんがお話しされたとおりで、それも順調に進展している。

オーテピア高知図書館は課題解決型図書館であり、例えば産業振興や移住にも対応して様々なサービスを提供しようとしている。高知市以外の市町村図書館が、同様にそこまで追従できるのか、同程度のサービスを提供できるのかと考えると、基本的な図書館サービスという意味では市町村図書館は非常に頑張って、変わってきている。しかし、市町村の図書館が課題解決型図書館としてサービスを提供していけるのかは、規模や人員の問題もあると思う。高知市以外の市町村は、例えば1次産業、2次産業から6次産業に取り組む中で、課題解決型のサービスにできるだけ触れていけるようにできたらいい。

電子書籍がこれからどんどん充実していくことを1つの核にしながら取り組んでほしいが、学術書はなかなか電子書籍化しない。それは部数が出ないことと、学者として20年前の主張を延々と今語りたくないという思いがある。つまりアップデートができないところもあるので、難しさがある。

2期に向けて県立図書館の役割、高知県の役割として、オーテピアから距離がある市町村の皆様にも課題解決型サービスや子育て支援、発達障害の方へのサポート等の展開を支援できていければいい。

本の形が好きだという、まさに、本質を突かれた委員の話があった。それは年齢のこともあるが、心理学的にはそもそも好きな情報のタイプがある。1つはひたすら文字を読むのが好きというもの。文字は自分のペースで読めるので、つまり飛ばしてもいいしゆっくり読んでも早く読んでもいいので時間的には非常に柔軟で、本が好きな人は非常に本が好きだということがある。他に、人によっては文字を目で追うのが疲れるので、話を聞きたいという人がいる。だから読み上げてもらった方がずっといいという人もいる。また、絵が好きという人もいる。本を読むというよりも本に入っている挿し絵や図を一生懸命読んでいくという感じがある。グラフ等があった方が文字で読むよりもわかりやすいという方もいる。

オーテピアの取組として、市町村図書館の支援もありいろいろな映像を提供している。映像も非常にわかりやすいというご意見がある。逆に、それぞれの情報のタイプが嫌いという人も一定数はいる。15分間の映像であれば、倍送りで7分半にはできるが、それ以上の加速はほぼ人間の能力を超えるので、どんな話でも

15分ネタは7分半かかり、10分ネタは5分かかる。話もずっと聞いていないといけなから聞き逃すことがあり、文字では500ページであれば逃げたくなる等、情報のタイプによる好き嫌いはいはりあると思う。それは、図書館利用者もそういうことがある。

電子書籍は電子の良さもあるが、欠点もある。電子の良さは検索エンジンが入っているの、キーワードを入れて検索したり、該当のページへ飛ぶことができたりして、忙しいときはそれがあると非常に便利。そういった意味で、様々な形態で利用者サービスができることが、1期から2期に向けて充実したものになっている。それがいろいろな形でより素晴らしい展開になればいいと思う。

2期の課題であり目標でもある、高知市民図書館の分館・分室の充実について。読み上げサービス等の本館で提供できるサービスが分館・分室でもより充実していけばいい。

遊具の展示について。そもそも遊具を展示する発想は、実際は対面で一緒に遊べば子どもたちにとってはそれが一番面白かったりするだろうが、コロナ禍の状況でそれもなかなか難しいので遊具を展示することだと思ふ。2期計画には明確に文言として記載されていないが、今年度・来年度という時間軸で考えると、やはりコロナ禍からどう脱却するのか、あるいはどう共存するのかという点が出てくると思う。

長期計画の場合、非常に理想的なものを書いているのだが、令和4年度はコロナのことを忘れてとは、なかなか取り組みづら。いろいろな意味でコロナと共存をしていかないといけな。その点を利用者のサービスにつなげながら取り組んでいく必要があり、その1つに電子書籍も含まれるだろう。そういった観点から、どうコロナと共存していくかということになるのではないかと思ふ。日本の方針も高知県の方針も、感染防止からできるだけ共存し様々な活動を復活させていく方向になっている。そこにはもちろん文化的な活動や教育、あるいは産業もみんな含まれている。そのような中で、特に令和3年度の貸出冊数は、図書館の果たす役割が重要であると利用者の方に思っただけなことでもあり、非常に良かった。これを継続しながら、課題解決型の図書館としては、コロナにどう立ち向かったらいいかということについても、ビジネス関係とか教育関係の皆様と連携をしながら「その部分はこういう課題解決もあるよ」というように展開できたら素晴らしいと思つた。遊具の展示という観点が、非常に心に響く話だった。

もう1つ、非常に長期的な図書館の役割の発展という意味では、読書という観点からすると、読むことで情報取得、あるいは情報を使いこなす点が、1期から2期に向けて非常に充実をしてきたところ。次は書くこと、つまり情報発信。例えば、私の大学では高知県警察と組んで不適切なSNSの利用や発信をモニターして、子どもたちが変な話に引っかからないようするボランティア活動をやっている。情報発信という意味ではやはりSNS等は、読むだけでなく、発信も表裏一体になっている。大きな意味では図書館サービスも県民・市民の皆さんが情報発信していくことの様々なお手伝いをできたらいい。

電子書籍も含めて、紙の図書でも情報発信に関する書籍や資料はすごくたくさんあると思ふので、どうしたらわかりやすい情報発信ができるか、あるいはホームページの作り方のようなテクニカルな面の支援を考えられないか。課題解決の一種、最終段階として情報発信をお手伝いするような取組も、2期では考えられたらいいと思っている。

最後に大学の観点から、教育機関との連携は大変ありがたく考えている。日本、高知県はある意味、安定したところもあるが、世界を見ると新産業に対応できない従業員が次々と解雇されている状況があり、特にコロナでそれが顕著になった。計画にも入ったテレワークについて、テレワークでできるものはそれでいいではないかということで、結局、新産業、体系、体制の電子化に対応できない方は次々と首になるというのが、諸外国では残念ながらさう勢となっている。

高知県の産業振興、地域振興を考えたとき、デジタル化の状況に対して、何らかの形でリメディア教育

みたいなことを提供できたらいい。第1段階として、いわゆるリテラシー教育も眼目に入っているが、子どもたちに対するリテラシー教育も非常に重要だが、大人に対しても、新しいデジタル化に対する、教育、情報提供や課題解決の支援ができていければいい。いわゆる「会社やります」「新製品について考えています」というビジネス的な視点も重要だが、そこまでいなくても、日々の仕事や活動の中で、デジタル化に対応するような、何かサポートができればいい。オーテピア高知図書館は課題解決型図書館であり、地域の発展、教育という観点からも、図書館の計画として充実したものになると考えている。

(事務局)

県立図書館の使命として市町村立図書館への支援は大きな柱であり、これまでも、人的・物的支援、市町村立図書館の司書の方々の人材育成を行ってきている。また非常に資料費の乏しい市町村があるので、県立図書館から資料を貸し出す物的支援と併せて、2期計画の主要ポイントとして、各地域の課題解決を支援できる図書館を作っていきたい。ただし、これについては図書館ごとのマンパワーや、様々な資源の問題もあるので、一律にすべての図書館の底上げはなかなか難しいと思っている。

ただ、県内でも図書館の新館の整備、新しい複合施設の中に図書館を作るという市町村も増えてきている。繰り返しになるが、これまでの図書館の箱物が綺麗になるだけということ、住民の方々が期待しているわけではないと思う。やはりオーテピアの地域版のようなものを期待されているのではないか。そのため、それぞれの地域の課題解決を支援できるように、当館の支援協力もその点を肝に銘じて様々な取組をこれから進めていきたいと考えている。

一例を挙げると、高知県の外国人材の戦略があり、これは外国人材の育成と確保のことで、この中でオーテピアの多文化サービスを位置付けている。オーテピア高知図書館だけがするのではなく、各地域で図書館が在住外国人の方々の居場所や学びの場になれるようにということで、今土佐市で取組を進めている。土佐市はベトナムの技能実習生が急激に増えてきているので、当館からはやさしい日本語を学習するための資料の貸出しをしたり、日本語を教える方のための資料を貸出ししたりしている。また、資料の貸出しだけではなく、ベトナム人との交流会を図書館で実施する等、住民の方と在住外国人との交流の場に図書館が参画していく形で、在住外国人の方々の暮らしやすい環境づくりに図書館が貢献できるように現在取組を進めている。次は香美市の新館がこの秋、オープンする。それぞれの課題が違ってくると思うので、地域の課題をきちんと把握した上で、図書館として何ができるかを一緒に考えていきたいと思っている。

コロナ禍からの脱却、コロナ禍における図書館サービスの提供の仕方について。令和2年に全国的に急激に増えたときには、全国の図書館が閉館したが、昨年夏の県の非常事態宣言時には、当館は閉めずに、感染防止対策を徹底した上で、県民・市民の皆様にサービスを提供した。

しかし、やはり図書館に来づらいという方も中にはいるので、非来館型サービスを充実させ、電子書籍もそうだが、読み上げ機能がついている電子雑誌アプリの新規導入、いろいろな手続きをメール等で行うような図書館に来なくてもできるサービスの提供を始めた。加えて図書館資料だけではなく、ビジネス支援サービスにもつながるもので、メイドイン高知のコロナ対策製品等をオーテピアで展示したことによって、企業の販路開拓に繋がったりしている。様々な場としても、オーテピアを活用していただけるように、いろいろなところに働きかけをしている。

情報発信について、電子書籍の利用が一昨年から比べると、半減しているというご指摘をいただいた。まだまだ電子書籍はPRが足りていないと思っているので、様々な媒体を活用してもっともっとPRを強化していく必要がある。ぜひ大学との連携等の中でいろいろな学生のアイデア等のお力をぜひお借りできれば

と思った。

情報リテラシーについて。高齢者、大人に対する情報リテラシー、例えば転職する方に対する情報リテラシー等もあると思うが、今年度、年代や対象別に情報リテラシーのプログラムを作っていく中で、高齢者等に対するプログラムを作っていけたらよいと思っている。

(事務局)

情報リテラシーについては、第1期のサービス計画上で掲げていたが、あまり具体的にできていなかったもので、今年度から本格的に始めるように、現在、担当者会を作って論議している。約3段階ぐらいのプログラムで、1つ目は非常に簡単なオーテピアのスマホアプリの使い方を覚えてもらうもの。2つ目はオーテピア高知図書館のWebサイト上で公開しているWebOPACという蔵書検索の使い方。これは高度な機能も仕込んであるが、機能設定に関わった自分でも使い方を忘れてしまうほど面倒くさい部分がある。図書館のマイリストを作ったりいろいろなことができるので、その程度まで使えるように情報リテラシーサービスとしてできないかなと考えている。3つ目はもっと高度なデータリテラシーや地図のリテラシー。例えば歴史は最もリテラシーが必要な分野なので、そういうのができないかと考えている。3番目はすぐに実現は難しいかもしれないが、概ねこの3つの段階で、できるものから実施するように検討している。

(事務局)

市民図書館としての課題解決型図書館について。これは図書館に限らず、今高知市の政策の3大柱の課題の1つとして、地域共生社会の実現、推進がある。その地域の住民が自分たち自身で課題を解決していくために、周りがどんなことをするのか、自分たちの持っている力をどう組み合わせる取り組んでいくのかということに気づくための施策をやっている。新しいことをやるというよりも、今あるものが皆が幸せになるためにどういう仕組みなのかを皆に気づいてもらい、それをつなぐことが大事で、図書館も重要な役割となる。大事な情報を自身で得られない、情報を得られると思っていない人が、実は図書館ではいろいろな情報を得られるということを知ってもらうのはとても大事なこと。当然その仕組みの中には皆が入っているが、仕組みの図の中に文字として図書館が入ってもいいという話をした。そういう地域のネットワークに図書館が加わって、活動を通じていろいろなところで図書館を知ってもらうことで、自然に地域での情報リテラシーも少しずつ実現していくのではないかと思う。新しい資源でなく、もともとあるものをどう活用するかに気づいてもらうことがすごく大事。

高知市だけでなく国や県でも、小さい単位で図書館の加わった成功事例があれば、それがいろいろなところにも派生していければいいのではないかと思う。

(委員)

かなり抽象的な議論になっているが、非常に大事な点なのでよろしく考えていただきたい。

(委員)

図書館は本を貸すだけでなく、地域の施設として役割があり、様々な場を提供したいという点について。先日、NHKのテレビの特集で、今の若い人は緩い関係を求めている、緩く集まれる場が必要だという番組を観た。緩く集まれる空間としては、図書館はまさにその1つだと聞いた。図書館といっても狭い図書館だとそれは少し難しいだろうから、オーテピア高知図書館は会話ができる図書館というコンセプトだったので最

適だと思った。地域の活性化やいろいろな場、若い人たちが緩く集まれる場というのもしないでほしい。以前、津野町での図書館大会での発表で、若い人が試験勉強をしに来たりしていることを聞いた。やはり地域でも居場所としての図書館の存在意義は同じだろうと思う。一方で集まる仲間がいない人もいる。不登校対策の1つになるのかもしれないが、図書館が居場所のない子どもが過ごせるような場になったら本当にいいと思った。

(事務局)

現在、図書館は敷居が低く、乳幼児から高齢者までいろいろな年代の方々が、1日3,000人前後來館されている。教育支援センターからいただいた情報では、オーテピア来館者の中には、オーテピアで昼間勉強している不登校のお子さんもいると聞いている。私たちはどなたでもウェルカムで、いろいろな形でオーテピアを利用していただきたい。中には学生が勉強しているから本を読めないというご意見もあるが、やはりいろいろな方々が共存していく場でありたいと思っている。

(委員)

図書館活動と課題解決を結びつけるイメージをどう捉えたらいいかを比喩的に考えると、世界があって、その中に個人がいる。世界はコロナを始め、ウクライナへの侵攻もあるなど、大きく変わっている。では、そのときに個人はどうするのかと考えると、情報リテラシーをベースにして、個人と世界の変革や世界の在り方との関係の問題を処理する。いわば世界と個人の在り方の関係の最前線に立つ機関が、今の課題解決型の図書館かと思う。

大まかに言えば、世界の変化と個人の在り方との一種の戦いの場、問題解決という視点から見ると、個人の能力強化のための先頭に立つ機関や組織の役割を図書館が担っている。このようにイメージ化すると少し問題は整理できるかと考えた。

古典的な、いわゆる伝統文化の保存や文化の継承という点から見れば少し違うかもしれないが、やはり課題解決を前面に出すという場合は、教えることよりも利用者の何らかの面での強化が大切になる。両方を含んでいいが、個人の能力を高める、戦闘力を高めるという意味合いで情報のやりとりをすることが必要。

例えば発信能力がこれから求められる件について、受信能力を高め情報を解読することも大事だが、最終的に世界とのやりとりを決めていく、自分の位置を決めるときには、やはり自分の意思を相手に理解できる形でどう示していくかというのは極めて大きいと思う。ロスのない広がり方、時間のかからないことも考えていく必要がある。個人個人で少し違うかもしれないが、世界の在り方と図書館利用者、その間に立つ図書館、それに加えてテーマの課題解決という関係。このイメージをある程度共有しながら、サービス計画の実施を進めていくと、もう少しいろいろなことが見えてくるように感じている。

小さなところからの積み上げも大事だが、やはり大きな俯瞰的なイメージを持つことも大事だと思う。

世界の変化と個人との関係はある面で戦いの部分があるので、そのための利用者の情報活用能力強化という面でどうしても課題解決が伴うというのが感想。

全体としては、サービス計画とその実施状況は特に問題はないと考えている。新しい試みもいろいろ取り組まれているが、実施に関しては関係者との綿密な協議と、そのときの相手の受け止め方、いわゆる広い意味での手応えを大事にしていきたい。成果はもちろん大事だが、決して押し付け型ではない。本当にいい意味での協力がなされた活動の成果を期待したい。

議事(3)

(委員)

図書館要覧の最終ページに漫画が出ているのは非常に素晴らしいと思う。図書館要覧は公文書なので、文書の裏側とはいえ、漫画が出ていて大変素晴らしい。表紙はいろいろと工夫しているところがあると思うが、表紙の1コマだけだとやはり内容が気になってしまうので、フルストーリーが最終ページに掲載されていて素晴らしいと思った。

(委員)

資料という点に関して、今回の資料、例えば1-2から3あたりのまとめ方も非常にすっきりとしてわかりやすい。理解しやすいまとめ方になっている。

様々な考え方があるかと思うが、他の資料もこういう分かりやすいものであってほしいと思うレベル。その点も考えての情報発信や委員がお話しになった書くということ。自分が納得するために書いているのではない、相手を説得する、納得させる、間違いない事実を伝える、誤解を受けないということが大事なのでそういうものの手本になるようなまとめ方だろうと思う。情報発信という点でも、意識して活動をしていきたい。

12:00 終了

令和4年度 第1回 高知県立図書館協議会・高知市立市民図書館協議会出席者名簿

令和4年7月14日(木)

○委員

オーテピア 4階ホール

役 職 等	氏 名	備考
高知市立大津小学校長、高知県学校図書館協議会会長	岡 林 宏 枝	欠席
高知市朝倉ふれあいセンター長、元小学校長	秋 森 眞 五	欠席
横浜小学校区青少年育成協議会 代表推進委員 元高知市青少年育成協議会理事	西 尾 敦 子	
津野町教育長	久 寿 久 美 子	
第四次高知県子ども読書活動推進計画策定委員	花 房 果 子	欠席
元高知市保育園長	神 野 万 里	
特定非営利活動法人こうち企業支援センター理事長	田 村 樹 志 雄	欠席
高知大学名誉教授	加 藤 勉	
高知工科大学情報学群長	篠 森 敬 三	
特定非営利活動法人高知市身体障害者連合会会長	中 屋 圭 二	

○事務局

所 属 等	職 名	氏 名	備考
高知県立図書館	館 長	山 崎 生	
	副館長	門 田 美 和	
	専門企画員(司書育成・サービス推進担当)	山 重 壮 一	
	企画調整課長兼チーフ(企画調整担当)	岡 村 祐 人	欠席
	チーフ(総務担当)	浅 川 美 佐	
	チーフ(図書利用担当)	谷 岡 祥 子	
	チーフ(情報資料管理担当)	渡 邊 哲 哉	
	チーフ(支援協力担当)	尾 形 千 晶	
	企画調整課 司書	八 田 裕 子	
	企画調整課 司書	上 岡 真 土	
	企画調整課 司書	溝 渕 里 奈	
高知市民図書館	館 長	高 石 敏 子	
	副館長	北 川 朋 代	
	図書利用担当管理主幹	武 井 一 仁	
	主幹図書利用担当係長事務取扱	西 内 久 代	
	図書利用担当係長	川 村 紀 代	
	主幹資料管理担当係長事務取扱	弘 瀬 聖 子	
	管理担当係長	横 川 良 明	
高知市 図書館・科学館課	課長	弘 瀬 友 也	